

座長集約

北里大学病院放射線部 秦 博文

企画2では東海大学附属病院 診療技術部 放射線技術科 堀江朋彦先生に「婦人科領域のMRI（臨床）」と題し、婦人科領域MRI検査の臨床編をご講演いただきました。堀江先生はご講演の冒頭に「婦人科領域のMRIについて臨床を中心にお話しますが、医師ではなく放射線技師から見た臨床ということで話を進めます。」とおっしゃいましたが、私は堀江先生のこのお言葉が非常に印象的でした。私も、普段MRI検査業務をしていて、医師から見た臨床と、技師から見た臨床は異なると感じていましたので、共感を覚えたわけです。では、先生のご講演内容についてご紹介したいと思います。

「MRIの最大の武器はコントラスト分解能である。」と、最初のスライドで先生が述べられました。これはMRIの基本です。婦人科領域のMRI検査は、近年発展してきた検査ではなく、MRIのコントラスト分解能の良さを活かし、以前から行われてきた検査です。MRI検査では、すべてのシーケンスが大切であること、優れたコントラストの画像を得るために自施設の装置で使えるシーケンスの特性を理解すること、また、それを臨床での状況に合わせて最適化すること（アーチファクト対策など）が重要であると先生は述べられ、過去に先生が実験されたファントム実験のデータ（SE法とTSE法でのコントラストの違い）、および、複数の撮像条件で撮像した臨床画像を提示しながら、詳細な解説をいただきました。特にSE法、TSE法の画像コントラストについては、1DFTを用いて非常にわかりやすく特徴を解説されたのが印象的でした。

続いては実際の疾患別の臨床画像について解説をいただきました。子宮、卵巣の奇形、良性疾患、悪性疾患、胎児・胎盤など妊婦に対する検査、急性期疾患の対応などについて症例提示をいただきました。T2WI、T1WIの重要性、造影検査の適応（意義）、variable refocus FAを用いた3DT2WIの有用性、または時間分解能、空間分解能がともに優れた3DT1WIの特徴などを具体的な症例を提示しながらの解説でしたので非常にわかりやすかったです。画像はどれも素晴らしく綺麗で、先生が冒頭でおっしゃっていたこだわりが存分に伝わってきました。解説では、解剖図、ステージング（病期分類）表なども合わせて解説していただき、臨床（医師側）が何を望んでいるのかについても、とてもわかりやすかったです。症例提示数も非常に多く、今回本研究会にお越しになられた先生方は非常に参考になったのではないのでしょうか。

ご講演後、妊娠されている患者さまに対する検査についての施設基準を知りたいといった質問、造影ダイナミックの撮像タイミングについての質問を会場からいただき、短い時間ではありましたが質疑応答がございました。

最後になりますが、MRI の初学者から上級者まで非常に理解しやすく、また、勉強になる素晴らしいご講演をいただいた堀江先生に感謝したいと思います。堀江先生、ありがとうございました。